

Title	和蘭商業資本のバルト海進出に就いて
Sub Title	
Author	高村, 象平
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1937
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.31, No.12 (1937. 12) ,p.1743(49)- 1780(86)
JaLC DOI	10.14991/001.19371201-0049
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19371201-0049">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19371201-0049</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 和蘭商業資本のバルト海進出に就いて

高村象平

トラアフェ河口のリユベックを盟主とし、ブルッヂェ、ロンドン、ベルゲン、ノヴゴロドに四大商館を持つた獨逸ハンザが、北歐交易を獨占して著しく發展したのは、十三世紀後半から十四世紀前半に於いてであつた。そして十四世紀の半ば(一三五八年)、それが諸都市の同盟として明確にその外容を整へ、更に對ワルデマル戰の結果七〇年シトラルズントの媾和により北歐に於けるその勢力をより一層確乎たらしめた時は、その發展の絶頂でもあると同時に、ハンザ史全體を通じての極めて注目すべき轉換期でもあつた。蓋しこの期を以つて同盟は、その本來の目的たる商業既得權の擁護に専一するに至つたからである。従つてこの時以後、獨逸ハンザ同盟はその諸般の對策、動向に於いて、謂はゞ守勢的態度を採るに至つたのであつた。そしてこの態度をその後約一世紀半餘に互つて續けた後、十六世紀から十七世紀にかけてそれは全く没落することになつたのである。(1)

獨逸ハンザの解體とその没落に就いては、從來多くの理由が數へられて居る。こゝにそれ等を列擧することはし

ないが、その中でも歐羅巴に於ける國民國家(Nationalstaat)の創成が、重要な契機であつたことは否むべくもない。即ち十四世紀既にその傾向を歐洲史上に示し始め、十五世紀に至つて確乎たる地盤を形成するに至つた中央集權的國民國家の形成といふ事實——例へば英吉利やネデルランド、又は瑞典に於ける等——は、それが獨逸ハンザの主要販賣市場であつた地に生起しただけに、ハンザ同盟の蒙つた打撃は大きかつた。それ等の地域は、夫々排他的政治經濟勢力圏と化して、いづれも外來商權を排することに努めたのみならず、更にその王權の保護の下に立つた遠地商人は、それまで獨逸商人によつて壟斷されて居た東西兩歐を連絡する交易界に進出するに至つた。即ち英吉利商業資本や和蘭商業資本等々の擡頭これである。

これに反して獨逸ハンザ加盟諸都市の母體たる獨逸は、時を同じうして小邦分立といふ政治的變化を爲しつゝある。謂ゆる小領邦經濟、分邦經濟の時代(Territorialwirtschaft)の出現である。その特徴は、狹隘な自國主義(Patrikularismus)であり、(c)その諸君侯の努力はそれまで自主的立場にあつた諸都市をその支配權内に引き入れることに注がれたのである。斯かる情勢は獨逸ハンザ加盟諸都市の分離の一因となり、それはハンザの内部的緊縛の弛緩、従つてその解體を促進するに與つて力あつた。(3)換言すれば獨逸ハンザは、その支柱として強力なる國民國家を有することなかつたが爲めに、その經濟的優越を維持することが出来なかつたのである。勿論この政治關係を基調とする發展が、獨逸ハンザを没落せしめた原因の總てではないであらう。然しその有力な根據であつたことは疑ふべくもない。

(1) 獨逸ハンザ史を簡潔に述べたものとして、私は次の書を推したい。

Walther Vogel, Kurze Geschichte der Deutschen Hanse. (Pflugsblätter des Hansischen Geschichtsvereins, Blatt XI.) (München und Leipzig, 1915.)

獨逸ハンザ發展の主要因として、民族、政治、軍備の夫々の要素が經濟と編み込まれ、それが統合されて居たことを説いたものとして異色あるのは次の論文である。

Fritz Rösig, Die deutsche Hanse. Wesen und Leistung, in Vergangenheit und Gegenwart. Jg. 25. (1935), Ht. 4. S. 198-216.

(2) 小邦分立による自國主義に就いての最近の研究としては次の講演に興味深いものがある。

Fritz Rösig, Ursachen und Auswirkungen des deutschen Partikularismus. (Recht und Staat in Geschichte und Gegenwart. 120). (Tübingen, 1937.)

(3) Fritz Rösig, Die deutsche Hanse, in Neue Jahrbuch für Wissenschaft und Jugendbildung. Jg. 1928. Ht. 3. S. 333

獨逸ハンザの衰退を示す具體的事實は、北歐商業圏に於いては、和蘭商人、英吉利商人の進出とその優勢化である。又南方に於いては、リュベックに代つてニュルンベルク商人の活動、そしてハンザ諸都市の外來商人排斥による新東西商業陸路の形成、従つてポオゼン及びライプチヒ兩市の擡頭である。本稿に於いて私はこれ等の中から最初のもの、即ち獨逸ハンザの壟斷したバルト海商業圏に對する和蘭商人の競争を取扱ひたい。そして大約十五世紀中葉に達成された和蘭のズント海峽通航確保に至る經過を辿らうと思ふ。従つて「中世の世界市場」と稱せられたブルウチエを繞つて惹き起された兩者間の對立、十六世紀初頭スカンデナヴィア諸國の政情變化に伴ふ兩者の抗争等

に就いては、他の機會に譲る。その理由は、北海沿岸よりユットランド半島を迂回しズント海峡を通過してバルト海に出る謂ゆる迂回航海(Umlandfahrt)の達成は、東西兩歐間の商品積換地としてリュベックが有した重要性を喪失せしめるに至つた一大契機なるが故である。獨逸ハンザの興亡史はズント海峡支配權の得失の變遷であるとも云はれる程に、この海峡がハンザに對して有する意義は大きい。それ故に和蘭商人がこの海峡を障害なく通過し得るやうになつたことは、獨逸ハンザが北歐商業界に有した權力の衰退を示すものであり、この事實を以つて和蘭商業資本のバルト海進出の足懸りは踏みかためられたものと做してよいかと思はれる。

ここに和蘭が右の商業的發展を爲した經過を取扱ふに際して、先づ彼等が如何にしてその競争力を形成したかを窺ふ要があらう。以下に於いて最初これを少し許り究めたい。(4)

(4) ヴンに云ふ和蘭人とは十三世紀後半以後の和蘭伯領内の住民の意味である。(Friedel Vollbehn, Die Holländer und die deutsche Hanse. (Lübeck. 1930.) S. 4.)

フランク帝國内に於いて獨立した個々の封建領地としては、Holland, Zeeland, Westriesland を包含する地域を指す。

(Ernst Danel, Die Ostseeverkehr und die Hansestädte von der Mitte des 14. bis zur Mitte des 15. Jahrhunderts, in Hansische Geschichtsblätter. Jg. 1902. S. 11.)

尙序で十四世紀末のネデルランドは王系によつて次の三つに分たれて居たことを附記する。

- 1) Bayrische Lande (Holland, Zeeland, Hennegau)
- 2) Burgundische Lande (Flandern, Artois)

3) Luxemburgische-Brabantische Lande (Brabant, Limburg, Luxemburg)

(Vgl. Henri Pirenne, Geschichte Belgiens. übers. von Fritz Arnhem. Bd. 2. Gotha. 1902.)

## II

和蘭伯領と境を接しデュッダマ・ゼエの東部に當る北ネデルランドの地は、謂ゆる獨逸東方植民運動期に際してその根源地ウエストフアアレンの諸獨逸都市より移住し來れるザクセン種族によつて多く占められて居た。ゲルダアランド、オオヴァイッセル、ドレエンテ、グロニンゲン等の地がこれである。それ故に、十二、三世紀に互つてこれ等の地に形成された諸都市は、その母市と經濟的利害を共にし、兩者は密接な商業關係の上に立つて居たのであつた。(1) 事實またこれ等の都市の多くは、獨逸ハンザ加盟都市たるものであつた。

(1) Rudolf Häpke, Friesen und Sachsen im Ostseeverkehr des 13. Jahrhunderts, in HGBll. Jg. 1912. S. 178-9.

これに反してデュッダマ・ゼエの西方から北海岸にかけて連なる西北ネデルランドの地は、前者に比してのみならず、全ネデルランドを通じて都市の發生は最も後れた。十三世紀に和蘭伯の支持と保護との下に、この地に諸都市が形成されるに至つたけれど、——例へばミッデルブルクが都市法を有するに至つたのは一二一七年、ハッレムは一二四五年、アムステルダムは一二三〇年——尙それ等はこの世紀を通じて經濟的意義を有する程度には達し得なかつた。(2) 即ちこの地域に於ける主要生業は牧畜・漁業であり、その他には自給状態を僅かに出でた毛織物製造、麥酒醸造等が行はれたに過ぎなかつた。従つて土産の脂肪・皮革・バター・チーズ、それにゼラントよりの海鹽、

和蘭商業資本のバルト海進出に就いて

ライン、マッス、シェルト諸川の河口地帯よりの魚類等が、近接せる大市場たるデヴェンター、ウトレヒト、ケルン、アンヴェルス等に運ばれ販賣されたに過ぎない。(3) 然しながら和蘭の北海沿岸地帯の住民、特にフリイスランド人は夙にその優れた航海能力を以つて有名であつた。(4) 一二七二年北ネエデルランドが饑饉の厄を蒙つた時、彼等はその船舶を以つて遙かバルト海に航して穀物を求めたと云はれて居る。(5) こゝに、西北ネエデルランドの經濟發展の出発點として、航海、従つて海商が十三世紀には既に或る程度の根柢を作りつゝあつたことが窺はれる。更にこの地域は外來遠地商人が早くから來往するところであつた。即ちその北部は獨逸ハンザの對フランドル商業の通過地であり、南部にはライン下流と英吉利とを結ぶ商業路が通つて居た。殊に十三世紀後半に於いてフランドルへ赴く他地人の交通が多くなつた時、これ等他地商人は進んで和蘭乃至ゼエランドの諸都市と友誼關係を求め、和蘭伯も關稅緩和策等によりこれ等他地商人をその領内に近づけんと努めた。そして一二九九年その好地勢を利用しライン下流のレック及びワール兩河とマッス河を往來する貨物に對して開市權を得たドルトレヒトは、十三、四世紀に於いて和蘭商業の中心地となつて居た。それ故に、一三五八―六〇年及び一三八八―九二年に、獨逸ハンザがフランドル及びアンヴェルスに對して商業閉鎖をなし、そのブルッヂェ商館を撤收した時、それに代る場所としてこのドルトレヒトを選んだと見られる。(6) こゝに以上を通じて云へば、十三世紀には西北ネエデルランドの地は、外來商人によつての商業を以つて主としたのであり、土着住民の商業發展はこれに及ぶことなかつたが、然しその有利な地勢の故に仲繼商業が發達し、その重點は南部の都市ドルトレヒトに置かれて居たと概括出來よ

う。

(ca) Ernst Daenell, *Holland und die Hanse im 15. Jahrhundert in HGBI.* Jg. 1903. S. 4. ネエデルランドに於ける都市は、地域から云へばフランドル、ブラバント、和蘭、ゼエランドの順に形成された。しかも前二者に於ける諸都市が封建領主との抗争によつて形成され又その後もこれを續けたに反し、北ネエデルランドのそれ等は、最初から領主の庇護の下にあつた。

K. Th. Wenzelburger, *Geschichte der Niederlande.* Bd. I. (Gotha. 1879. S. 150-1.)

Henri Pirrené, a. a. O. Bd. I. (Gotha. 1.) S. 221.

(cs) Ernst Daenell, *Die Blüthezeit der Deutschen Hanse.* Bd. I. (Berlin. 1905.) S. 267.

(4) 中世初期のフリイスランドの商業に就いては、増田四郎氏「中世北歐商業の展開(上)」(社會經濟史學第七卷第六號、三〇―三三頁)參照。

(5) Rudolf Häpke, a. a. O. S. 181-2.

Walther Vogel, *Geschichte der deutschen Seeschifffahrt.* Bd. I. (Berlin. 1915.) S. 189.

この時バルト海地域に於いては、フリイスランドの産物たる家畜、チーズ、バター等は欲求されず、穀物の代償としては貨幣を要求したが、偶々一二七〇年の第七・十字軍航海の爲めに良貨は缺乏して居り、穀物購入は非常に困難を伴つたと云ふ。

(6) Ernst Daenell, *Holland.* S. 7-8.

然るに十四世紀、殊にその後半になると、和蘭經濟發展の中核は、マッス河の北方に推移する。それは何よりもこの北部諸都市に於ける製造業の發達と、北海に於ける鮭漁業の増大とに基くものであつた。そしてこの生産の増加

和蘭商業資本のバルト海進出に就いて

を基軸として、和蘭の遠地商業は活躍の場所を見出すに至つたのである。

先づ毛織物製造は、それに隣接せるフランドル地方の卓越さに刺戟されその影響の下に發達した。和蘭伯ウィルヘルム、アルブレヒト等の特權賦與による保護乃至都市當局の取締と奨励とは、諸都市に於ける斯業の發達に寄與するところ甚大であつた。又その品質も、産額増大による土産原料の不足の結果、英吉利羊毛の輸入を見るに至つて(7)、フランドルより得た技術と相俟つて改善された。のみならずそれは手工業生産の域を越えて家内工業の段階に達した。ライデン、アムステルダム、ハーレム、更にミッデルブルク、ティリクゼエ、ドルトレヒト等は、諸都市中その生産額の大きなものに屬する。(8) それ等はいづれも前世紀に主として農村に於いて自給的規模で生産されて居たとは異り、輸出産業に進んだのであつて、それは毛織物取引の主要市場たるブルッヂェに送られ、こゝでハンザ商人の手によつて東歐に運ばれたのである。(9) 即ち和蘭毛織物は、こゝに東西兩歐交易上に大なる役割を演ずる準備を完了したのであつた。次にこの世紀に至つて發達を遂げたものに麥酒醸造がある。從來この地、殊に北部和蘭にはハムブルクの麥酒が運び込まれて居た。そしてハムブルク市民はアムステルダム、シタヴォオレン等にその私商館を設けたが、それは専ら麥酒の販賣の爲めのものであつた。一三七四年ハムブルクの獨立醸造者四五七名中、一二七はアムステルダム商館の爲めに、五五はシタヴォオレン商館を目的として生産したと云ふ。然しながら十四世紀末以降、ハムブルク麥酒の和蘭輸入額は徐々に減少を見るに至つた。蓋し和蘭伯ウィルヘルムの保護の下に、十四世紀中葉以降ハーレム、ホウダ、デルフト、アマアスフォルト、ロッテルダム、アムステルダム等の諸都市に

於いて和蘭麥酒の増産が行はれ、プレュメン、ヴィスマール、リュベック特にハムブルクよりの輸入麥酒に對抗するに至つたからである。この麥酒増産は、和蘭醸造者が主としてハムブルクより得た新製法の應用に俟つことも亦多かつた。勿論前記の如きハムブルク麥酒輸入の壓力の下に置かれて居たのであるから、和蘭麥酒醸造業の擡頭は毛織物工業に於ける程の速度で行はれたのでない。従つてその輸出地域も隣接地以上に出することはなかつた。(10) 然しながらこの土着生産業の勃興は、その對ウェンデン諸都市、特に對ハムブルクの商業に可成りの打撃を與へることになり、それはその後の兩者の商業關係に多大の影響を及ぼすことになつた。

(7) N. W. Posthumus, *De Geschiedenis van de Leidsche Lakenindustrie. I. De Middelleuven.* (s-Grav. 1908.) bl. 183-4.

例へば英吉利羊毛ステッパルたるカレエとライデンとの結び付きを見よ。

(8) Ebenda. bl. 30, 36-37.

(9) Ernst Daenell, *Blitzzeit.* S. 263.

(10) Ebenda. S. 266-7.

以上の都市工業の發達と並んで北部和蘭の經濟的擡頭に資したものは、北海鮭漁業である。特に十四世紀末以降のアムステルダムの繁榮はこの發展に基くこと多いと云はれた程である。從來ネデルランドの沿海に於いて漁獲されたものは、生のままで又は燻製として、ケルン乃至アンヴェルスに運ばれて居たのであつた。(11) 然るに十四世紀前半には、和蘭漁夫はその對岸ヤマウスに多數赴いて居り、これの勢力を惧れた英吉利は漁獲期間を定めて許すに至つて居る。しかもその港が土砂によつて埋没されるやうになり、漁獲直後その地の海濱に於いて加工する

和蘭商業資本のバルト海進出に就いて

ことが困難となつてから、和蘭漁夫は漁獲物を直接和蘭に運ばねばならなくなつた。こゝに從來の小型漁船に代つて、船上に於いて鹽漬を行ひ得る餘地を有する大型漁船使用の必要、更に魚網の改善の必要を生ずるに至つた。(12) そして從來の沿海漁業は深海漁業に推移した。これは一方に於いて和蘭の造船業、附屬具製造、網製造、桶製造等に活氣を與へると同時に、他方鯡の即時加工による品質改善によつて、和蘭の北海鯡の需要を増加せしめたのである。ネデルランド沿岸に於いて漁獲された鯡加工が改善されたことも勿論である。即ちこゝに北海鯡は遠地商業に採り上げられるやうになつた。それは十四世紀末ケルン、アンヴェルスを経て、ライン流域、南獨逸の地に運ばれ、こゝに獨逸ハンザの獨占するシヨオネン鯡との販賣競争が展開されることになつた。殊に十五世紀初頭以來シヨオネン鯡漁獲量の減少と、ウェンデン諸都市が丁抹との間に戦を交へて居た結果によるシヨオネン鯡の價格騰貴とは、和蘭の鯡漁業の發展にとつて好個の材料となり、それは東歐にも亦進出するに至つた。(13) それはひとり和蘭商人が自らこの地域に携え入つた許りでない。獨逸商人さへもが、バルト海地域に於ける鯡の需要に應ぜんが爲めに北海鯡を取扱つたのである。(14) しかも獨逸ハンザの支配せるシヨオネン鯡漁業——ベルゲンの鱈漁業も同様であるが——に於いては、漁撈は土着漁夫の行ふところであり、獨逸ハンザ商人はそれに資本を投じ又その取引を行ふ。これに反して和蘭漁業に於いては、漁夫は勿論、漁船裝備資本の據出者(多くは都市民)も、これを取引する商人も、すべて同一國民であつた點に於いて、多大の強味を有したと云へよう。(15) そしてこの資本の在り場所は、魚類取引に對して都市の支配を生ぜしめたのである。

(11) Ernst Daenell, *Blütezeit*, S. 268.

(12) Nelly Gotschalk, *Fischereigewerbe und Fischhandel der niederländischen Gebiete im Mittelalter*, (Bad Worishofen, 1927.) S. 7-9.

(13) Nelly Gotschalk, a. a. O. S. 10, 29.; Ernst Daenell, *Blütezeit* S. 269-70.

(14) Ernst Daenell, *Ostseeverkehr*, S. 16.

(15) Friedel Volbahr, a. a. O. S. 11.

斯かる深海漁業の發展が和蘭の海上商業に對して刺戟を與へたことは、直ちに考へ得るところである。しかもこの深海漁業による經驗は、和蘭人を優秀な海員として育成するに甚だ役立つたと云はねばならない。その外、上述の和蘭諸生産業の擴大、謂はゞ輸出對象物の増産の他面に於いて、輸入品として穀物が大いに求められたことは、和蘭商業に活氣を與ふるものであつた。即ち都市工業の發達と結んで人口は増大する。然るに北部ネデルランドに於いては、ゼェランドを除いて穀物の産は殆どない。そのゼェランドに於けるものを以つてしただけでは、増加人口を給養し得ない。こゝに穀物輸入の必要があつたのである。従つてこの輸入と前記輸出との兩課題を得て、和蘭の遠地商業は發展への機縁を與へられたのである。

フリイスランド人のバルト海への航行に就いては既に一言したが、それよりも前から行はれて居たのは、ライン河口地帯より英吉利に至る航海であつた。これは和蘭人によつても引續いて行はれ、殊に十四世紀和蘭がバイエルン王家の支配下にあつた間、(16) 英・蘭兩國の政治的友誼はこれを大いに助長した。例へば一三二〇—七〇年リン

やグレット・ヤマウスには多くの和蘭人、ゼランド人が居たと云はれる。(17)のみならず一三六三年カレエが英吉利羊毛ステュブルとなつて以来、英吉利羊毛に対する和蘭毛織物マニユファクチュアの需要増大は、この地への和蘭人の交通を増加せしめた。その他方に於いて一三八四年から八八年にかけ短期間ではあつたが英吉利羊毛ステュブルとなつたことからも解るやうに、ミッデルブルクは英吉利人の來往する地であり、彼等の外には蘇蘭人、フランドル人、南歐人もこゝに來會した。(18)これ等とは反對の方向即ち東方への航海は、先づハムブルクに向ふのであるが、和蘭の商業航海活動にとつて最も重要な基軸となるものは、それを越えて遙かバルト海に至る直通航海であつたと云はねばならぬ。

- (16) 和蘭伯としてマズメネ家は Johann II. (1299-1304), Wilhelm III. (1304-1337), Wilhelm IV. (1337-1346) と續きその後、バイエルン家に代る。その諸伯は次の如くである。Margarete von Bayern (1345-54), Wilhelm V. (1354-58), Albrecht I. (1358-1404), Wilhelm VI. (1404-17), Jakobäa von Bayern (1417-33), Johann von Bayern (1418-25)。一四一七年以後の最後の兩者の間に繼承争ひが生じ、これに介在したのがブルグント・ヴァロメ家の Philipp der Gute である。
- (17) Rudolf Häpke, Hansische Umschau, in H.G.Hl. Jg. 1920/21. S. 241.
- (18) Ernst Daenell, Bitterei. S. 270-1.

一二七二年の西フリースランド人のバルト海航行が、その後散個な企てから徐々に正規的な航海に變つたとは、從來諸説の推定するところである(例へばヘプケ教授、フォオゲル教授)。それはメックレンブルク乃至ポマーン沿岸の地から穀物を積出すに止まらず、(19)進んでゴットランド島をも訪れるに至つた。この理由としてヘプケ教授は、

十三世紀末フランドル商人が、その商業の本來的取引地たりし英吉利から閉め出された爲め、彼等はこれに代る活躍の天地を東方バルト海に求め、その際フリースランドの船舶を雇つてゴットランドに航し、該地に於いて露西亞の産物を得んとしたのだと説かれて居る。(20) 即ち、これを以つてすれば、フリースランド人は獨り自らの爲め(穀物買入)に航海したのみならず、他地人に雇傭されて海運に従事したのである。しかも彼等がその行動を、その欲求する穀物をバルト海地域から輸出することに限る間は、ハンザ商人にとつて何等これを拒む根據はなかつた。然しながらそれが謂ゆる東西交易界に闖入し來りその伸張市場ヴィスビーに侵入するに及んでは、黙視することを得なかつた。即ち一二八〇年、八二年リュベックは、フリースランド人及びフランドル人のゴットランド航行を禁止するに至つて居る。(21)

- (19) この北海とバルト海とを直接結ぶ迂回航路史に於いて最初有名となつたのは、シトラルズントである。ズンド海峡の南方最も近くに位置し、穀物、木材に富む背後地を控へ、更にバルト海地域の諸産物を寛めたから、ズンド海峡を越えた北海の船舶がこゝを早くから訪れたのは當然であらう。(Walther Vogel, Seeschifffahrt. Bd. I. S. 251.)
- (20) Rudolf Häpke, Friesen. S. 183-4.
- (21) Ebenda, S. 185-7.

扱てこの西フリースランド人の活動を基礎として十四世紀の半ばには、和蘭人、ゼランド人のバルト海航行が始まる。そのうち特にチリクゼエ、ブリール、アムステルダム等の市民の努力が著しい。その海運組織が船舶共有組合(レニヂライ)の形態をとつたこと、これと並んで個人經營のものも存したことに就いては續説する迄もない

和蘭商業資本のバルト海進出に就いて

であらう。この海運業が和蘭遠地商業と結ぶことに就いても断るまでもない。ここに問題となるのは、それ等のバルト海への進出が、當時この海を自己のものと做して居た獨逸ハンザと如何なる摩擦を生じたかである。

## 三

一三五五年の夏、和蘭伯は和蘭人、ゼネランド人、フリイスランド人取締の爲めに代官をシヨオネンに派遣した。(1)これによつてもこの頃既に可成りの和蘭商人が、謂ゆる迂回航行をなしてバルト海に進んで行つたことが解らう。又それはシヨオネン地方までに限られたものではなかつた。一三六〇年の頃には丁抹、諸威、瑞典、プロイセン、ウヘンデン、その他東歐諸地(in den coninciken van Danemarken, van Noirweghen, van Zweden, in all Pruysslande, in den Weenschen Steden ende in den Oesterschen steden ende in allen Oestlande)に於けるアムステルダム市民の取締規定がその都市から發せられて居ることはこれを證明しよう。(2)

(1) Hansisches Urkundenbuch, Bd. III, Abt. 1. (Halle a. S. 1882.) Nr. 332.

(2) HVB. Bd. III, Abt. 2. (1886.) Nr. 553.

尙東歐諸地へのアムステルダム市民の航海は *Grosse Seefahrt* と呼ばれ、ハムブルク、ブレエメン、東フリイスランド、英吉利、蘇蘭、カレエ、佛蘭西への航海は *Kleine Seefahrt* と稱された。

シヨオネンに就いて見れば、その南端スカネェルとファルシタ、ポの漁場は、當時尙北歐交易に大なる役割を演じて居た。蓋しそれが單に鮭漁獲の豊富を以つて有名であつたのみならず、年々八月末より十月に至る間ここにウ

エンデン、ボマーン、デユッダアゼエ、その他北海沿岸諸地から集る鮭取引商人の間に、鮭取引を越えて東西兩歐貨物の交易が行はれたからである。殊に十四世紀の中頃には西歐の非ハンザ商人——英吉利、蘇蘭、和蘭等——も多くここに集つた。然し尙最初の間は、それ等ハンザ商人と非ハンザのそれとの間には衝突は少なかつたと傳へられて居る、寧ろハンザ同盟にとつては、對丁抹關係からして、シヨオネンに於ける商業權益を支持する協力者を必要としたからであらう。然しながら漸次ここに來會する非ハンザ商人が増加するに従つて、ハンザ商人の中にその勢力の増大、従つて彼等が從來有せる優勢の減退を懼れて、これを排斥せんとする傾向が現はれて來る。偶々一三六一年丁抹のヴィスビー略取に端を發した謂ゆるワルデマール戦により、シヨオネンの地も再び丁抹支配下にとり入れられることになり、(3)その實現は少時延期されたのである。

(3) Dietrich Schäfer, Die Hansestädte und König Waldemar von Dänemark. (Jena. 1873.) S. 262 ff.

この翌年のリュベック市長ヴィッテンボルクの敗戦、六五年ヘルシングボルクの媾和、六七年ケルン聯盟、そして七〇年シトラルズントの媾和等に就いての経過をここに辿る要はない。主要なのは、ケルン聯盟に於いてハンザ同盟は和蘭と提携したことであり、更にその勝利によつて和蘭も亦ハンザと同一特權を獲得したことである。即ち六八年和蘭諸都市はシヨオネンに他のハンザ諸都市と共にフィッテ(Vitte, Fite)(4)を所有することを得た。このことは非ハンザの他の競争者例へば英吉利商人に比して有利な立場を作り上げ、(5)その後企てられたハンザの和蘭排斥(シヨオネン取引からの)に對して有力な抵抗力となるものであつた。然しこれあるからとて和蘭商人は該地

に有せるハンザ、特にリュベック商人の卓越せる地位を揺がすことは出来なかつたと考へられる。寧ろ和蘭商人にとつては、このフィッテ所有によつて興へられた機會を利用し習得せる鯡の加工乃至運搬に就いての経験の方が重要であつたらう。何となればこの知識を彼等は、その北海鯡に對して應用し、以つてこれをシヨネン鯡と對抗し得る程度のものとなし得たからである。然しながらこの後に於いて、和蘭諸都市がシヨネン航行者組合を設立したことは、(7) 尙この地への關心が少くなかつたことを物語るであらう。

(4) Urkundenbuch der Stadt Hannover. Tl. I. (Hannover, 1860) Nr. 451.

„vite“ 及び „die Plätze, auf denen die Angehörigen der verschiedenen Städte ihre Buden errichtet, ihre Geschäfte betrieben hatten“ (Karl Kunze, Ein Statut der Schonenhärgilde zu Harlem, in HGBL. Jg. 1895. S. 137.) と解するが正しいと考へらる。今適當な譯語が考へ付かないので、原語のまま使用して置く。

(6) „Item to vorstrende uns Englische Jude von erme profite unde komen in de lande, dar se hanterit.“ (Hansereesse. Bd. III. Leipzig 1875. Nr. 102.) シヨネン取引に對してロンドン市民は述べて居る。

(9) Vollbehr, a. a. O. S. 17.

(7) 例へばハンブルクやホッダに於ける Schonenvardersgilden. (Karl Kunze, a. a. O. S. 140-4; N. W. Posthumus, a. a. O. bl. 289)

しかも鯡取引市場であると同時にバルト海商業の仲繼市場であつたシヨネンの地は、やがてその重要性を漸次喪失しはじめた。その由つて來るところ、既に一言した北海鯡の優勢化及び北海とバルト海とを直接連絡する航海規模の擴大である。

北海とバルト海とを迂回航路によつて直接連絡する試みは、ヴィキングアの活動以來、上記フリースランド人の穀物買入の爲めの企て、その後には於けるゴットランド人の北海渡航、更にアムステルダムその他和蘭商人のバルト海奥地への航行、リュベック商人の對ベルゲン・對英吉利交易等々、夙に行はれて居た。然し十四世紀半ばに至るまでは、丁抹權力の南下政策もあり、北海よりズンド海峽を経てシヨネンに達し、更にバルト海奥地に進み入ることは、さして頻繁であつたとは見られない。

北海とバルト海の連絡、換言すれば西歐と東歐との連絡は、初期に於いては北海岸よりアイダア河を溯リシュレスイッヒを経てバルト海に至る謂ゆるアイダア—シュライ商業路を探つたが、後にはハムブルクよりオルデスレエ間を陸路、ここからトラアフェ河を下つてリュベックへ、次いでバルト海に出るハムブルク—リュベック商業路を経るを常とした。この商業路とリュベックとの關係が、リュベックをして獨逸ハンザの盟主たらしめるに與つて力あつたこと周知の如くである。(8) 従つてこのハムブルク—リュベック線の維持は、リュベック(廣くいはば獨逸ハンザ)の最も留意するところであつた。然るにユットランド半島を周回して東西兩海を直接連絡する迂回航路は、當然のことながら右に對する競争線たるものであり、ハンザ乃至リュベックにとつてその動向は極めて重大な問題であつた。十四世紀後半迂回航行は増加し、ここにホルンタイン地峽を横斷するハムブルク—リュベック商業路は脅威を受ける。それは西方に於いては英吉利、和蘭、デューダアゼ諸都市、東方に於いてはプロイセン乃至リフランド諸都市の、相互直接連絡が異常に増加したことに基く。これがシヨネンに於ける仲繼取引

を衰退せしめたことは前述したが、更にこれは獨逸ハンザの支柱たるブルッヂェーノヴゴロド連絡を脅かし、獨逸ハンザ存在の本來的意義を薄弱ならしめる。蓋しその盟主リュベックが取引の中心からはづれるといふこと許りでなく、東西兩歐交易そのものがハンザ商人ならぬ他地商人の手中に移ることもなるからである。これは結局、リュベックの獨逸ハンザ内部に於ける指導的地位の喪失のみならず、獨逸ハンザの組織そのものが根柢から揺がされることを意味するに等しかつた。(9)

( ) ホルシタイン地峡線の重要さを示す一例として、一三六八年度にオルデスレエを経てリュベックに搬入されたフランドル・英吉利毛織物の價額(但しリュベックに於いて課税されたもののみ)は、十五萬リュベック・マルクであつたといふ。リュベック教授の換算によれば、これは一千萬乃至一千二百萬マルクに値する。(Fritz König, Die Hanse und die nordischen Länder, in Hansische Beiträge zur deutschen Wirtschaftsgeschichte, Breslau, 1928, S. 158)

尙、この年のリュベックに於ける輸出入品、船舶交通等に就いての詳細な研究が最近刊行された。編者によれば、リュベック教授の評價は尙低過ぎる由である。

Georg Lechner (Hrsg.), Die hansischen Pundrollisten des Jahre 1368. (18. März 1368 bis 10. März 1369) Lübeck, 1935 (Quellen und Darstellungen zur hansischen Geschichte, N. F. Bd. X.)

然しこの時は尙對マルデマル戦が全く終つて居なかつたことに就いて留意せねばならない。

(9) 獨逸ハンザの北歐交易界に於ける地歩は、この迂回航路による許りでなく、更に南獨ニュルンベルク商人の支配する別個の東西連絡線の創成によつても脅かされることになるのであるが、これに就いては暫く筆を措く。

この迂回航行参加者の内容からして、單に非ハンザ遠地商人のみでなく、獨逸ハンザ加盟の東方諸都市さへも、

その母體ハンザの經濟制度を揺がす役割を演じつゝあることが解る。これは獨逸ハンザの內的紐帶の弛緩に外ならない。その結末は如何にして破れ出したのであるか。そしてハンザの利益を最も代表するウエンデン諸都市、特にリュベックの競争者となつて現はれたのであるか。通説によれば、獨逸ハンザ加盟諸都市内部にその分離傾向が示され出したのは、ハンザの最盛期、即ちシトラルズントの媾和の結ばれた一三七〇年代であつたと説かれ、そしてそれは第一にリュベックを中心とするウエンデン諸都市と、ダンチヒ、リガを夫々の中心とするプロイセン及びリフランドの諸都市との利害の背反に基くものと述べられて居る。然しそれは如何にしてこの時代に生じて來たのであつたか。

## 四

獨逸ハンザがリュベックを盟主として仰ぐに至つた理由の一つに、その加盟都市の多くがリュベックを出發點とした獨逸東方植民運動の結果建設された獨逸都市であり、従つてこれ等の間には單に經濟的な關係許りでなく夫々の都市の支配層間に人的紐帶が固くつながれて居たことがあつたのは否み得ない。このバルト海南岸の獨逸諸都市は、西方より絶えず移入する人口によつて補はれて居た。(1) 然るに十四世紀の中葉、西歐人口の相對的過剰は一時中絶する。周知のペスト蔓延に基くものである。これをダンチヒに就いて見れば、一三六四年より九九年に至る間、人口移入は恒に減少して居るが、しかもその移入者の中で、獨逸本國より赴いた者の割合は、東歐植民地域或は獨逸騎士團領有地より移入せる者の割合に比して少い。(2) このダンチヒ人口關係からして、十四世紀前半に至

るまでの本國(ウエストフアレン、ウエンデン等、殊にリュベック)との間の血縁的聯關は稀薄となりつゝあり、従つてダンチヒ市民は獨自の發展を遂げ行く傾向にあつたと云ひ得やう。

(1) Fritz Röig, Wesen, S. 202-3.

(2) Fritz Röig, Aussenpolitische und innerpolitische Wandlungen in der Hanse nach dem Stralsunder Frieden (1370), in Hansische Beiträge, S. 142.

ダンチヒ市の成立に就いては諸説があるが、(3)尙それが獨逸騎士團の活動と切り離し得ぬことは確かであらう。この騎士團の活動とリュベックより出發せる獨逸植民との間に密接な關係の存すること、それがその後にも續けられたことは云ふ迄もない。十四世紀初頭に至る迄の騎士團領有地に於ける指導都市はエルビングであつた。エルビングはリュベック商人の建設せる都市である。これから生じた兩者の密接な關係に基いて、謂ゆるプロイセン諸都市はハンザ全體の政策とその指向を一にして居た。然るに十四世紀初頭に至り生じたエルビングに代るダンチヒの優勢化、(4)そしてダンチヒに對する騎士團の支配は(5)、こゝにプロイセン諸都市に於ける對ハンザの傳統的紐帶をゆるめることになつたと云はねばならない。更にこれに多大の影響を及ぼしたのが、英吉利とプロイセン(特にダンチヒ)との商業關係である。それは大約十四世紀中葉に於けるエドワード三世治下の保護政策に力を得て、英吉利毛織物製造が質及び量に於いて著しく發達したことに基く。(6)この新興製造業が求めて得た海外市場は、プロイセンの地であつた。そしてそれと反對に東歐土産の穀物・木材はプロイセン、ハンガリーよりの銀・銅と共に、英吉利に運ばれたのである。しかもこの兩者が相互に直接迂回航路によつて結ぶこと多くなるに従ひ、その活動は

獨逸ハンザの傳統的政策と背離すること甚しくなつた。何となれば、既述の如くズンド海峽經由線の擡頭は、從來のバルト海地域——リュベック——ハムブルク——ブルッヂェ商業路の後退を意味し、更に獨逸ハンザの地盤たりしブルッヂェの伸繼地としての重要性を減退せしめることになつたからである。

(3) Erich Keyser, Die Entstehung von Danzig, (Danzig, 1924.) S. 49 ff.

(4) これにはウィグセル河口の地勢變化が與つて力あつたといはれる。

(5) Walther Recke, Danzig und der deutsche Ritterorden. (Bremen.) (Hansische Volkshefte, 8.) S. 7-22.

(6) 大塚久雄氏「英吉利初期資本主義の支柱たる毛織物工業の展開(一)」經濟志林、第十卷第一號、五八一—七二頁参照。

英吉利商業資本の大陸進出は、それが英吉利内に於ける從來の獨逸ハンザ商人の排斥と結んで居るだけに、獨逸ハンザにとつての打撃は多大であつた。上記の如くそれはその内部に於ける經濟的軋轢を明かにしたのである。又ダンチヒの擡頭は、その背後地との間の商業をその手に收める努力を生ぜしめるに至つた。然しこの背後地市場に對する從來の通過地としての役割を止揚して、それに對する支配權を獲得せんとする努力は、ひとりウィグセル流域に對するダンチヒにのみ見られる現象ではない。リフランドのリガも亦、その背後のデュナ流域の交易を、從來の西方ハンザ諸都市の支配を廢して、己がものとなさんとするに至つた。十四世紀六十年代に於いてノヴゴロドのハンザ商館ザンクト・ペテグア・ホオフの指導をその實力の下に動かし始めたこともその具體例とならう。一三六八年以降リガはリュベックとの間にデュナ商業の自由に就いての交渉を開始し、やがてリガは、デュナの經濟的支

配者となり、その勢力はこれを航行する西部ハンザ商人を壓迫するやうになつたのである。(7) これ等の經濟的利害に基く獨逸ハンザ内部の分裂傾向は、英吉利のバルト海進出を契機として十四世紀の後半に顯はになつたが、更にこれに資するものとして當時獨逸内部に於ける政治的關係があつたことを見ねばならない。

(7) Hans Georg v. Schroeder, *Der Handel auf der Dina im Mittelalter*, in *HGBL. Jg. 1917*, S. 75 ff.

獨逸諸都市と帝國との關係は、カール四世の治下(一三四七—七八年)漸次背反し行きつゝあつた。それは皇帝カール四世がワルデマル戦に際して採つた態度からも、又ハムブルクとホルンタイン伯との紛争に際し皇帝が伯に味方したことによつても、或はその後丁抹繼承者選定に就いて皇帝とハンザとの利害が相反したことによつても、示され得やう。(8) 更にこれと時を略々同じうして獨逸には、封鎖的小分邦の併立傾向が現はれ始めて居る。これは當然それまで自主的であつた諸都市との間に抗争を生じた。その盛になつたのは、十五、六世紀に於いてであつたが、十四世紀も大半を過ぎた頃から、諸侯伯の自國主義的行政は、都市の自主的地位を蠶食し始めつゝあつたのである。七十年代に於けるリュッネブルク繼承紛争の如き、或は八十年代のドルトムントに對する領主の態度の如き、孰れも都市の完全な自由な時代の過ぎ去つてしまつて居ることの證左に外ならない。勿論諸都市はその經濟政策方面に關しては尙自主的行動領域を有したと云ふものゝ、斯くの如き獨逸内部の變化が、ハンザ加盟諸都市の、そしてまたその全體の動向に著しい影響を及ぼしたこと十分に推定されるところである。更にハンザ諸都市自體の内部に於ける抗争の生起をも見ねばならない。即ち六、七十年代に始まつたニイダグザクセンのハンザ諸都市に於ける民主

運動である。元來ハンザ諸都市はその成立、發展の由來上、遠地商人の謂ゆる貴族主義的統治の下にあつた。この支配層に對して民主主義的態度を持った手工業者乃至小商人はやがて抗争するに至る。(9) 一三六五年ブレュメン市會の支持者たるブレュメン大司教に對しての反抗や、その後ハムブルクに於ける、又は八十年代のリュベックに於ける内部闘争の如きその顯著なるものに屬する。これ等内部的紛擾が、獨逸ハンザの對外政策の統一にとつて負擔となることは云ふ迄もないであらう。

(8) Wilhelm Mantel, *Kaiser Karls IV. Hoflager in Lübeck*, in *Beiträge zur lübisch-hansischen Geschichte*. (Jena, 1881), S. 296-302.

(9) Fritz Rötig, *Aussenpolit.* S. 143; Georg Bessel, *Bremen*. (Leipzig, 1935), S. 107-8, 113.

斯かる情勢の中に、英吉利に次いで和蘭商人は突き進んで行つたのである。しかも彼等は決して單獨であつたとは云ひ難い。蓋しバルト海の奥地には、先づ以つてダンチヒが彼等を喜んで迎へ容れたのであつたから。一三四八年乃至一四〇〇年に於いて、アムステルダム、エダム、ドルトレヒト、チリクゼエ、ミッデルブルク等々から來り、(10)ダンチヒ市民權を得た和蘭人の數は尠くないと云ふ。このこと、相並んで彼等はダンチヒに於いて何の制限を受けることなく取引を爲し得たことが解らう。彼等は同じくこの都市を訪れた英吉利商人よりも待遇されたりし。(11) アルツスホッフはその商談の行はれる場所であつた。(12) この和蘭商人がこの地に齎した重なるものは、和蘭毛織物であり、北海鯡であり、稍々後れてはベエの鹽であつた。反對に彼等が持ち歸るものは、この都市

の奥地からの穀物と木材とが主要なものであつた。この商品内容によつて兩者の間に強き經濟的共同利害の存在、従つて友好關係の存在が明かにされるのである。

(10) Theodor Hirsch, Danzigs Handels- und Gewerbsgeschichte unter der Herrschaft des Deutschen Ordens. (Leipzig. 1858). S. 129.

(11) Ernst Daenell, Ostseeverkehr. S. 13

(12) 抽稿、十五世紀ダンチヒに於ける船舶共有組合の内容に就いて(二・完)『社會經濟史學、第七卷第五號、三三一―四頁』和蘭毛織物は、はじめブルッヂェ、アンヅェルス、ベルゲン・オブ・ツォム等の市場に運ばれ、ハンザ商人の手を経てプロイセン並びにリフランドに送られたのであつた。然しその毛織物がハンザの力を以つて一定の販賣圈を得た頃、和蘭商人自らが土産商品を携えて東歐諸市場に現はれるやうになつた。殊にプロイセンに對する和蘭毛織物の直接輸出は多かつた。十五世紀初頭にはその賣捌きを一定時日中止した程である。(13) 次に北海鯡のバルト海諸市場進出の根據に就いては既に述べたところであるから、こゝには和蘭人は自らその鯡をノヅゴロドに迄運んだことを記すに止めやう。(14) ヘエの鹽も亦、和蘭人はプロイセン乃至リフランドの商人の運送に備はれたのが、これに關與する端緒であつたらしい。即ち彼等はその運送業務に従事する船長としてバルト海に現はれたのであつたと思はれる。然し十五世紀には和蘭商人自らベエに赴き、その鹽を自己の計算でプロイセン、リフランド諸地に運んだ。この西佛蘭西からの海鹽は、それまでバルト海市場を支配して居たリュッネブルクの岩鹽に比して、精良ではなく又鯡の加工に最適とは云へなかつたが、その長距離に對する運賃を加算しても廉價で賣捌き得る點が、最大

の競争能力とであつた。(15) 殊にバルト海奥地の諸都市に於いて、リキベックの支配を脱せんとする氣運の濃くなると共に、プロイセン並びにリフランドの商人がこれに多大の關心を寄せたのは當然であり、又非ハンザ商人がこれをそれ等の地に運ぶのを歓迎したことは、これを理解するに難くない。殊に十五世紀の二十年代に於ける丁抹對ハンザの戦時中、プロイセン人がズンドを航行し得なかつた時、これを仲介した和蘭商人の得た利益は多大であつた。(16) としてこの利益は、和蘭の海運業擴大の刺戟となつたのである。

(13) 一四〇二年トロンブルクに於ける決議の一節。„Item umme dy Vlamynge, Hollandere unde Zeelandere ist obir eyn getragen, daz dy von Danzick sie vor sich bebodin sullen, unde in sagen, daz sie nicht stete durch daz yor yre gewand sullen veyle habin, sunder aise is noch alder gewonheit wonlich ist geweset.“ (HR. Bd. V. (Leipzig, 1880) Nr. 101 § 4.)

(14) Leop. Karl Geertz, Deutsch-Russische Handelsgeschichte des Mittelalters. (Lübeck, 1922) S. 311-2.

(15) Ernst Daenell, Blüthezeit. S. 446-7.

(16) 和蘭の船隊がプロイセン又はリフランドの港に到着すると、鹽の價格は急に引下るを常としたと云ふ。(Arthur Agats, Der hansische Batzenhandel. (Heidelberg, 1904) S. 43.) その詳細に就つては Vgl. Walther Stein, Handelsbriefe aus Riga und Königsberg von 1458 und 1461, in HGBll. Jg. 1898. S. 59-125.

和蘭が穀物を必要とすることは既に一言した。その本國の近くにある地方としては、エルベ流域があり、ここから和蘭に運ばれた。然しそれ以上に穀物産地としては、ウィクセル及びヂュナの流域が主要であつた。しかもこの穀物運送によつて得る和蘭海運業の運賃収入は、穀物買入資金として役立つことにも留意せねばならないであら

う。(17)勿論この運送業務と並んで和蘭商人自らの穀物購入も行はれたのである。(18)この外に和蘭がバルト海東部より輸入せる商品は、船材乃至築堤材料としての木材であつた。して見ればその主要輸入品、従つてプロイセン・リフランドの輸出品は共に荷荷たるものであり、ここにこれ等地方の船舶が、ウエンデン諸都市の船舶に比して大型船の建造が早く行はれたのは當然であらう。(19)蓋しウエンデン諸都市の取扱ふ商品の主要部分は、比較的高價な相荷であつたからである。

(17) Walther Vogel, H. J. Smit, De opkomst van den handel van Amsterdam, in H.Gbl. Jg. 1915. S. 361.

(18) 船主と荷主とに就いて、前掲拙稿(一)「社會經濟史學、第七卷第四號、六一七頁參照」。

(19) 北歐に於ける大船建造の端緒はクラヴェル船への推移に始まる。然しその以前獨逸騎士團では二〇〇ラスト、三〇〇ラストのホルク船を所有して居た。拙稿「中世末北歐に於ける海運業一斑——特に十五世紀のダンチヒに就いて」(社會經濟史學、第四卷第九號)參照。

## 五

これ等の商品の種類から見ても、またそれが迂回航路によつて運ばれたことから考へても、和蘭と獨逸ハンザとの間にバルト海市場支配に關して競争が行はれ、しかもその各々の立場は、前者が攻勢的であり後者が守衛的であつたことは容易に理解し得るところである。素より和蘭のバルト海進出の初期に於いては、ハンザ諸都市、特にリュベック商人が寧ろ協同的態度を持したこと、既にシロオネン交易に就いて窺つたところであり、また穀物運送の如きはハンザ諸都市レエデライも欣然これに参加して居た。これは和蘭商業資本の侵入といふものの、尙最初から

大規模なものでなく、従つてリュベックの支配を揺がすことはなかつたからでもあらう。この他面に於いてリュベックはその競争力の強化に努めてゐる。例へばズンド航行の増大によるホルシタイン陸路の危機に對して、一三九〇——九八年に互リシテクニッツ運河を開鑿した如き、ベエ鹽のバルト海進出に對して、リュベック鹽を強制的にリュベックに集中せしめる方策を採つた如きである。(1)しかもやがて英・蘭商業資本の進出がその積極さを増大するに伴ひ、ハンザの既得權擁護政策は特に強化されて、外來商人排斥を以つてその經濟政策の基調とするに至つた。この獨逸ハンザの政策轉化に就いては、既に一言したが、その加盟都市内部の權力推移も與つて力あつたといはねばならぬ。

(1) このリュベックの支配に對して、エルベ河とヴィスマアルとの間に新たに水路を設け、リュベックを経ずしてヴィスマアルよりバルト海にリュウネブルク鹽を搬出せんとする計畫が、一四二二年と一四三〇年とにあつたが、遂に實現せず、終つた。然しこの計畫の存在そのものの中に、ウエンデン都市内部に於いてすら漸次非協同の態度が現れつゝあつたことを看取られる。

Wilhelm Reinecke, Geschichte der Stadt Lümburg. Bd. I. (Lüneburg, 1933) S. 289 ff.

Hermann Heiniken, Der Salzhandel Lüneburgs mit Lübeck bis zum Anfang des 15. Jahrhunderts. (Berlin, 1908), S. 145.

一四〇八年から一六六年にかけてリュベック市會は手工業者層の支配するところであつた。(2)これは前世紀の終り頃からの民主運動の勝利たるものであつた。然しそれは同時に、その利益代表者たる手工業者乃至小商人の把持する見解を、都市リュベックの、従つて獨逸ハンザの經濟政策の上に現はすことを意味する。勿論この政策の轉換は、

手工業者が実際にリュベックの支配権を把握する以前から認められるところであつたことにも留意されねばならない。即ちこれが生じたのは、それまでの政治的支配層たる遠地商人・都市貴族が、その政權問題から手工業者の注意をそらす爲めに、經濟問題に關しては手工業者乃至小商人の意を迎へる方策を採らざるを得なかつたからである。(3)のみならず、遠地商人間に於いても、謂ゆるツンフト的な態度は自生されて居たかとも思はれる。即ちその積極的活動による商權把握の限界に一應到達したからである。その結果生じたことは、彼等の商業的活動の初期に見られる如き生々とした營利衝動の命ずるまゝに自由に活動することなく、個人的活動を制限し既存交易關係を安定化せしめることに努力が拂はれることである。具體的には遠地商人組合の出現がこれに當る。即ちリュベックに於いて一三七八年シヨオネン航行者組合の成立、(4)八三年ベルゲン航行者組合の設立、(5)その後リガ航行者、ノヴゴロド航行者、シトックホルム航行者、フランドル航行者、英吉利航行者等々の組合が設けられた如き、或はハムブルクに一三七六年フランドル航行者、英吉利航行者、九五年にシヨオネン航行者組合が成立した如きである。そのいづれも目的とするところは、母市と相手地との交易を獨占し個人的競争を排除することであり、又その勢力によつて母市の政治を左右するにあつた。(6)斯かる現象は、遠地商人の活動の増大といふよりは、寧ろ積極的活動の停滯を示すものと云ふべきであらう。(7)換言すればツンフトの見解の支配である。そしてこの遠地商人層内部に於いての排他政策の自生の期に當つて、彼等が都市支配権を保持する爲めには、手工業者・小商人層の歡迎する外來商人排他政策を採用せざるを得なくなつた事情が附加されたのであり、更に一四〇八年手工業者層の市會支配に

よつて、一層その傾向が明かにされたのであつた。

- (6) Max Hoffmann, Geschichte der freien und Hausstadt Lübeck. Bd. I. (Lübeck. 1889). S. 145-50.  
(7) Fritz Röig, Nord. Länder. S. 151-2.  
(8) C. Wehrmann, Das lübeckische Patriziat, insbesondere dessen Entschung und Verhältniss zum Adel, in HGBll. Jg. 1872. S. 113.  
(9) Friedrich Bruns, Die lübecker Bergfahrer und ihre Chronistik. (Berlin. 1900). S. CXI-VII.  
(10) Ernst Daenell, Blütezeit, Bd. II. S. 424.  
(11) Vgl. Fritz Röig, Grosshandel und Grosshändler im Lübeck des 14. Jahrhunderts, in Hansische Beiträge zur deutschen Wirtschaftsgeschichte. S. 242. Anm. 38.

一四一六年再びリュベック市會は遠地商人層の手中に歸し、これと略々時を同じくして、ヴィスママル、ロシトック、ハムブルクに於ける内争も舊態復歸を以つて終つた。然し一度採られた排他的經濟政策の動向は、この支配層の交代によつても一變されることなく、謂ゆる封鎖的態度は引き続き採られたのである。従つて都市貴族の復活といふものの、實質に於いては十五世紀以降の獨逸ハンザは手工業者の影響を脱し得ずにあつたとも云へよう。

斯くの如き内紛、更には十五世紀初頭の波蘭・リタウエンと獨逸騎士團との戦ひによる東歐の混亂は、英吉利乃至和蘭商業資本の進出に好機會を提供したのであつた。ベルゲンへの英吉利商人航行の増加の如き、和蘭商人の穀物貿易の増大、リフランド商業への進出の如き、その著しきものに屬する。和蘭の穀物購入に就いては、それが東

歐市場より爲される限り、ハンザ諸都市は何等拒む理由がなかつたこと前述の如くである。然るに和蘭商人はバルト海港都市の有する開市権を避けて生産者と直接買入をなす(先買 *Vorkauferei*) に至つて、ハンザ商人はこれを黙過することを得なくなつた。これは謂ゆる *Klippingen* による穀物の輸出であるが、(8) 和蘭船舶が多く訪れたのは、ヴィスマツェルとヘル島との間にあるゴルヴィッツであり、(9) 更にエルベ下流やプロイセンにもこれを求めたのである。しかも一四一四年ザクセン・ラウエンブルク公エリッヒがその領内に於ける和蘭商人の交通に對して、ハンブルク商人と同一の特権を賦與する如き(10)、和蘭商人は獨逸國內に於いても支持者を有して居たのである。然しこの和蘭の侵入はリュベックを中心とする獨逸ハンザの寛容し得るところではなく、一四一七年のハンザ會議に於いて穀物はハンザの諸港からのみズンド乃至地峽を経て輸出さるべき旨を規定された。(11) とは云へ尙一四三五年ヴィスマツェル市會が再びこの禁止を布告して居ることから見れば、(12) *Klippingen* の利用は容易に中止されなかつたことと考へられる。

(8) *Pfückhafen Winkelhafen* とも稱する。その意義は、*Häfen, welche zur Ein- und Ausschiffung von Kaufmannsgut gebraucht wurden, ohne dazu privilegiert zu sein.* (Karl Koppmann, *Zur Geschichte der meklenburgischen Klippingen*, in *HGBll. Jg. 1885. 8. 105-6.*)

(9) *Ebenda. S. 104, 106.*

(10) *HUB. Bd. V. Nr. 1131.*

(11) Johannes Hansen, *Beiträge zur Geschichte des Getreidehandels und der Getreidepolitik Lübecks.* (Lübeck. 1912). S. 7.

(12) Karl Koppmann, *Klippingen. S. 106.*

然し *Klippingen* の問題以外に於いても、ハンザ都市は穀物輸出に關して統制を爲すことは難かつた。ウェンデ諸都市とプロイセン諸都市がこの問題に於いて協調し得ないことは直ちに首肯されるが、後者に於いても十五世紀のハンザ全體が企てた外來商人の經濟行動制限政策(謂ゆる *Gästerecht* の如き)の遂行は圓滑に爲し得なかつたのである。それは領主勢力と都市勢力との利害の背反に基くものであつた。即ち獨逸騎士團は穀物輸出に就いてプロイセン諸都市と競争したのであつた。都市の開市強制にとつて先買が障害となることは上述の如くであるが、騎士團官吏はこの先買を大規模に行ひ、又、その財政的根據からして都市の穀物輸出を禁じその命令解除に對して許可料を徴し、反對にプロイセン諸都市が聯合して輸出を禁止した時には和蘭商人に輸出を特許する等の擧に出た。(13) 騎士團が大土地所有者の代表者として都市の強制開市政策に反對し、自由な直接取引を有利となしたことは云ふ迄もない。それ故にプロイセンに於いて對外來商人權(*Gästerecht*)の制定は後れたのであつた。しかもこの事情は和蘭商人にとつて有利に作用したこと勿論である。

(13) 詳しきは W. Naudé, *Die Getreidehandelspolitik der Europäischen Staaten vom 13. bis zum 18. Jahrhundert, als Einleitung in die Preussische Getreidehandelspolitik.* Bd. I. (Berlin. 1896) S. 263-78.

和蘭商人がその活動を單に運送業務に限る間は、その活動に對してハンザは積極的に阻止しようとはしなかつたが、その範圍を越えてバルト海諸都市の背後地に於ける商業に自ら關與せんとした時はさうでない。殊にリフラン

ドからノヴゴロドへの進出、即ち露西亞商人と直接取引を営むことは、獨逸ハンザの權益を害すること多大であった。一四二三年、二五年と、リフランドに於ける外來商人の取引は禁ぜられ、又和蘭人がハンザ都市の市民權獲得によつてハンザの特權を享有することを禁じた。然しながらリフランド諸都市に於いて、海運業者としての和蘭人は缺くべからざるものであり、遂にリガの反對によつて彼等が運送業務を営むことは可及的に制限する旨に改められたが、このことは尙和蘭商人に自ら取引を行ふ可能性を残すものであつたと云はねばならぬ。又リフランド諸都市も、その背後地市場に於ける外來商人の直接取引はハンザの一般政策に準じて禁じたけれど、諸海港都市に於ける取引に就いてはこれを許容したのであつた。(14) しかも尙その後にも和蘭商人がその禁止を冒してノヴゴロドに於いて取引した個々の資料があることから見れば、(15) 十五世紀にバルト海よりノヴゴロドに達する商業は獨逸ハンザの支配するところであつたが、然し恒に危機を妊むものであつたと云へよう。

(14) Leep. Karl Goetz, a. a. O., S. 426-7.

(15) Ebenda. S. 427-31.

ハンザがその對外政策に於いて轉換を示し出してから採つた方策としては、上記の諸禁止の外に非ハンザとの組合營業禁止、(殊にレエデライに於ける)(16)、非ハンザの代理業務禁止、航行季節の規定、對外來商人權の嚴守等があるが、更に進んでハンザの取扱商品より和蘭製品を除外するにも至つて居る。その主要なものは、粗製品なるが故にこの理由を以つて和蘭毛織物の取扱ひを拒否したことであらう。そしてライデンやアムステルダムの毛織物が

ハンザによつて取扱はれることを望むならば、ハンザの製造規定によつて生産すべきものであると要求した。(17) この排斥の反面には、和蘭・英吉利毛織物の競争によるブルッヂェ市場の價值喪失をとり戻さうとする努力があつたと云はねばならない。即ち和蘭毛織物の劣悪が問題ではなく、ブルッヂェの毛織物市場の繁榮を回復せしめることが主點だつたのである。

(16) この禁止がプロイセンに於いて遵守されなかつたことに就いて、前掲拙稿(一)、一五一—一六頁参照。

(17) Volleber, a. a. O., S. 30.

然しながら十五世紀の十年代より始まるハンザの守衛的對外政策の數々にも拘らず、その實施は却つてハンザ加盟諸都市の内在的對立を明かにしてしまつたものと云はねばならぬ。しかもこのハンザの内部的對立に於いて最も甚しきもの、即ちリュベックと東部バルト海諸都市との政治・經濟的分岐こそが、和蘭商業資本進出、即ち和蘭獨逸ハンザの對立の進展にとつて重要な鍵を與へたのである。斯かる獨逸ハンザの統一的政策遂行に障害の存するに對し、これに對立する和蘭は十五世紀前半新なる政治體制を背景として商業資本の強化を行つたのであつた。

## 六

和蘭・ゼエランド、エィノイの攝政であつたバイエルン家のアルブレヒトは、一三八九年その兄ウィルヘルム五世の歿後、和蘭伯となつた。周知の如くこの頃は佛蘭西に於いてはジャックケリーの騷動あり、英吉利に於いてはワット・タイラーの運動の起つた時代である。この和蘭の地にも貴族勢力を支柱とするヘック黨と新興都市の商業勢力

を基幹とするカベルジ<sup>o</sup>オ黨との對立があり(1)前者には上層市民に對する反抗から都市手工業者が加盟して居た(2)。和蘭商業資本の擡頭期にあつたアルブレヒト伯はカベルジ<sup>o</sup>オ黨に味方し、一三五九年市民の參政權を認可したが、これはヘック黨の反對するところであつた。アルブレヒトに繼いだウィルヘルム六世は、先主と政見を異にしたと傳へられるが、然し商業的勢力の増進に努力したことは既述の如くである。然るにその息女ヤコベアはヘック黨によつて支持され、從來有した政治・經濟力の喪失を懼れたカベルジ<sup>o</sup>オ黨はここにヘック黨と諸都市に於いて又農村に於いて公然相争ふに至つた。この内争を利用したのは、それまでにその勢力をネデルランドの北方に擴大しつゝあつたブルグンド公フィリップである。公は諸都市が從來有せし特權を擴大し(ドルトレヒト、チリクゼ、ブリイル、ロッテルダム)、又その市民のフランドルに於ける交易に諸特權を許可して、(3)カベルジ<sup>o</sup>オ黨を味方として和蘭繼承争ひに關與した。一四二八年デルフトの媾和により公は和蘭の攝政となり、三三年ヤコベアは公に和蘭舊領を完全に讓るに至つた。その讓位に際して、和蘭・ゼラントの商業活動は、フィリップ公の如き權力ある領主の下にあつてのみ一層進展し得やうと述べたと傳へられる。(4)獨逸皇帝ジグムントがその西北國境防備の爲めに、和蘭がブルグンド公の範圍となることを阻止しようと試みたが效果なく、斯くて和蘭・ゼラント、エィノオの地は、既にフランドル、ナムゥル、ブラバント、リムブルクを掌握したブルグント公領に合せられ、ネデルランドの地はウトレヒト、ゲルダアランド、西フリースランドを除いて、すべて公の下に統合されたのであつた。

(1) 2の兩黨の語源に就くは K. Th. Wenzelburger, a. a. O. Bd. I. S. 220-2.

(2) Henri Pirenne, Belgien, Bd. II. S. 209, Anm. 2.

(3) ドルトメントに對しては一四二五年、チリクゼ、ブリイルに對しては一四二六年、ロッテルダムに對しては一四二八年。HUB. Bd. VI. (Leipzig. 1905). Nr. 615, 619.

(4) Ernst Danel, Holland, S. 6.

獨逸ハンザの内部的分裂に對比して、和蘭に於ける統一的政治支配及びこれへの商業資本の密接な結合といふ相反せる動向は、ハンザの政策遂行に變化を生ぜずにはおかなかつた。例へばこれまでネデルランドが諸封建領主間に分割されて居た場合には、その相互の特殊利害關係を利用してハンザに有利な政策を遂行し得た。ブルッヂェ商館を隣邦ドルトレヒトに移しその取引減退によつてフランドル乃至ブルッヂェがその歸還を請ふには、ハンザ商人に對し新たに諸特權を認めまた損害賠償を支拂はねばならなかつた如きこれである。然しブルグンド公の手中にネデルランドが統合された今となつては、これは爲し得ない。(5)またブルグンド公の努力はその領邦を中央集權的に組織化することに向けられて居たから、(6)ハンザは今や個々の都市と接觸するのではなく、國家權力と交渉するに等しくなつたのである。しかもそれと反對に和蘭諸都市にとつてはそのブルグンド公の努力は、その商業發展に際して國家の支持と保護とを得ることを意味する。これは國家權力の支持を欠いた獨逸ハンザにとつて極めて不利な點であると云はねばならなかつた。こゝに和蘭商業資本のバルト海に對する積極的活動は、安固な地盤を得て更に増大し得る可能性を與へられたのである。然しその實現に對しては尙幾多の障害があつた。對ハンザの公然の

戦争はその一つである。

(16) Walther Stein, Die Burgunderherzöge und die Hanse, in HGBll. Jg. 1901. S. 14.

(17) Vollbchr. a. a. O. S. 38-9.

一四二二年、二六一三五年、三八一四一年に於けるウーデン諸都市と丁抹との戦ひ、そしてこれ等に際して和蘭が對ワルデマール戦の時とは正反對に後者に組したこと等の経過は省略してよいであらう。そのいづれもがズン下海峽の航行支配を目標として行はれたこと、この航路の閉鎖は和蘭の殆ど全商業(對丁抹、對バルト海地域)の停止を意味したので強力的にこれを破らざるを得なかつたこと、報復行爲として和蘭(アムステルダム、ライデン)に於ける獨逸商人の行動を阻止したこと、(7)和蘭と獨逸ハンザとの戦ひであるにも拘らずプロイセン・リフランド諸都市は冷淡であつたこと等を列擧するに止める。最後のコペンハーゲンの媾和に於いて十一年の休戦が約され(8)リュベック對和蘭の闘ひは一應解決を見たが、その時リュベックにとつてはスカンデナヴィアの商權競争者として和蘭が立ち現れて居り、和蘭にとつては穀物輸入杜絶に基く困窮が全土を襲つて居たのである。然し媾和によつてズン下航行が解放されたことは、この間に於いて丁抹がハンザとの關係をふりすて、和蘭と結ぶに至つたことの爲めに、單なる解放に止まらずこの航行權を和蘭に確保せしめることになつたと云はねばならない。そして和蘭が戦争による疲弊から再び立ち上るに際してこれは極めて重要な役割を演じたのであつた。それは和蘭商業資本の根據たるレデライの活躍する場所への唯一の通路なのであつたからである。

(7) Kurt Stahr, Die Hanse und Holland bis zum Utrechter Frieden 1474. (Marburg, 1907). S. 44-5.

(8) Vgl. Ebenda. S. 44-60.

右の一四二六年以降のズン下に於ける戦争は、和蘭の經濟状態に甚しい困窮を齎した。バルト海商業の遮断によつて、その商・工・海運業の活動は停止されざるを得なかつたからである。その他一四三八—四〇年の物價騰貴、一四四〇年和蘭・ゼーランドの製鹽業者が多く英吉利に渡つたこと、ライデンの毛織物マニファクチュアの沈滞等、(9)その戦争の結果であると云はれる。然しながらこの戦時中に於いて結實した和蘭に於ける政治的變化は、結局商業資本の爲めのものに外ならなかつた。和蘭諸都市に於ける遠地商人層の優越が確保されたのは、このブルグンド公の統一に俟つこと甚だ大であつたのである。この政治的背景の下に十五世紀中葉には和蘭商業資本は再びその容姿を新たに整へて立ち上つた。毛織物製造、造船、鮮漁業等の發展、ライデン、アムステルダム、ミッデルブルク等の港市の活動等、海運業・遠地商業には新たな活氣が齎らされた。この發展には、この頃のハンザの對フランドル政策の失敗——一四五—一五六六年ブルッデ商館のデヴェンター及びウトレヒトへの移轉、ハンザ商人のフランドル毛織物取扱禁止——も與つて力あつた。即ちフランドル毛織物の代用品として、嘗てとは一變してハンザ自ら和蘭毛織物を取引對象としたのである。しかもハンザはブルグンド公の統一國外の地に商館を移轉したものの、港勢不良の爲めハンザの交通路は和蘭を経由することとなり、(10)これは和蘭商業に活氣を與へるものに外ならなかつた。これ等はいづれも和蘭がブルグンド公國に統合されたが故に、和蘭にとつて有利に、従つてハンザにとつて不利に作用したと云はねばならない。

(9) Ernst Danelj, Holland. S. 26.

(10) Ebenda. S. 28.

和蘭商業資本が再びバルト海に進み入る爲めの條件は斯くして形成された。しかも和蘭にとつて尙幸ひしたことは、プロイセン諸都市の商業の停滯であつた。それは一四五四年に於ける騎士團戦争の開始に由るものであり、斯くて和蘭船舶は東歐に於いて單に運送業務のみならず商業範圍を擴大して行くことがこゝに亦容易にされ得た譯けである。然し尙諸威に於いて、東北歐に於いて獨逸ハンザの既得權は確乎たるものがあつたから、その進出は摩擦なしでは行ひ得なかつたこと斷るまでもない。既述の如くこの兩者の對立は東歐西歐を仲繼ぎする交易を中心として轉回する。従つてそれは東歐諸市場に於いて競争された許りでなく、西歐の中心市場、そしてハンザ同盟の咽喉にも相當するブルッヂェの興廢が、その動向を左右する上に極めて大なる關係を持つたのである。事實和蘭商業資本が従來の東西商業路と競争するズンド迂回航路を確保したことは、その競争力を強化するに甚だ役立つた。然し尙ブルッヂェに比敵しそれに優る西歐の中央市場をその手中に得てはじめて和蘭の東西交易制覇は完成へ近付くと云はねばならぬ。しかもこれが實現せられるには尙一世紀餘の時日を待たねばならなかつたのであつた。

以上和蘭商業資本が獨逸ハンザの牙城バルト海市場への進出に就いて、その前史とも看做さるべき經過を述べた。それが如何にして可能であつたかをこゝに繰り返す要はないであらう。廣い意味で政治的統一と經濟的發展との密接不離の聯關が、この獨逸ハンザ没落史の一齣の中から汲みとられるのである。 (二二・一一・一六稿了)

## モレリイ『自然法典』と其思想的背景

平 井 新

モレリイ(Morelly)が『自然法典』(Code de la Nature, ou le véritable esprit de ses loix, de tout tems négligé ou méconnu. 1755)は、其の根本に於て、一方、デカルト、スピノザ、ライブニッツを一聯とする十七、八世紀の支配哲學たる合理主義をその經とし、他方、遠くストア、エピクロスに端を發し爾來連綿として、近世に至り、グロチウス、プウフェンドルフに於てその體系化を見たる自然法思想をその緯とし、その間、同じく時代思想たる經驗論、感覺論を多分に攝取し、之を縫ふに熾烈なる道德的欲求を以てせる一個の社會改造計畫案である。この意味に於て『自然法典』は正しく時代の典型的正兒であると言へる。

十七世紀中葉以來、ヨーロッパ殊に大陸に於ける支配的哲學思潮はデカルトの合理主義哲學であり、分けてもフランスは其中心であつた。洵にフランスは分析の故郷であり、而もその眞に古典的國土であつた。蓋し、デカルトが彼の哲學改革と哲學的決定的改造を企てたのは實に此國土の上に於てであつたからである。而して此デカルト的